



与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編纂室

TEL098-871-9981 FAX098-871-9982 郵送先 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



1950年（昭和25）6月、与那原警防団を合祀するため消防団一同によって上の毛（現在の上の森公園）に慰霊塔が建立された。（後方は雨乞森）

写真提供：故 安谷屋 之男（中島区）

※警防団（警察と消防の補助組織で、戦時下において住民の安全を守り、疎開や避難誘導も行った。）
 ↳上の森公園建設で、現在は与那原町役場の北側駐車場近くに移転されている。

—与那原町史編纂室より—

『与那原町史だより』は今回で4度目の発行になります。これまでは、戦時記録編での聞き取り調査でご協力いただいた町民の方の戦争体験の証言を紹介してきました。現在、町史編さん事業は『資料編 戦後の与那原』の発刊に向けて活動しており、終戦後の与那原の復興から沖縄県が日本に復帰した1972年までの与那原の歴史を調査しています。調査によってわかった与那原にまつわる出来事や人物などを取り上げながら、これからも町民の皆さまに紹介していきます。

聞き取り調査
人々の証言①

運命を分けた 船の搭乗

柴 引 初 子
昭和7年生
【当添区】

◆ 一般疎開で熊本へ ◆

戦争当時、私は熊本へ疎開していたので、沖縄戦の悲惨な体験というのはない。ただ、当時私は十三歳であつたが、沖縄からは早く離れたほうがよいと考え、自分ひとりでも、親から印鑑を盗んででも学童疎開をしようと思つていた。

しかし、母は本土で暮らしていた経験から、その寒さも厳しさもわかつていたので、子供だけの疎開には猛反対され、私と母と弟の家族全員での一般疎開となつた。

◆ 運命を分けた船の搭乗 ◆

疎開するために乗つた船の名前はよく覚えていないが、同じ頃に出港

した船で、米軍の攻撃に遭つた船があつた。たぶんあの対馬丸だつたと思うが、学童疎開も一般疎開も一緒に搭乗してたと記憶している。

その船には知り合いの兄妹が乗つており、彼らは無事助かつた。たどり着いた先の旅館で、私達の持つていた米や油味噌などを分けてあげたのを覚えている。

ある若い女性は、甥だつたか姪だつたかが行方不明で、自分一人生き残つてしていると嘆いていました。

そして、このような悲惨な出来事のなかでも幸運に恵まれた人がおり、船にのつた家族五人が全員無事で、なおかつお腹の大きかった奥さんが赤ちゃんを産み、六人家族となつて疎開先へ行くことになつた、という話もあつた。

当初、私達の疎開先は宮崎県であつたが、熊本県に

変更になり、熊本県下益城郡六嘉村という村にたどり着いた。

◆ 引き揚げ ◆

そこ（熊本県）には三カ年ほどおり、昭和二十一年には疎開生活を終えて沖縄へ引き揚げてきた。

噂では沖縄は玉砕され、皆亡くなつたと聞かされていたので、母はかつて住んでいた大阪へ行くつもりだつたようだ。だが、私と弟は沖縄へ帰



「戦後引揚者上陸の地」と書かれた石碑

疎開地から引き揚げてきた人々はまずこの地に降り立った。

りたいと強く主張した。母は沖縄に帰つたら畑仕事などをして、苦勞するのは目にみえていると説得していたが、最後には沖縄へ帰ることになつた。十二月の寒い時期だつたと思う。長崎県佐世保から船に乗り、中頭郡中城村の久場崎へ着いた。そして、当添に着くと、そこには噂に反して、すでにたくさんの人々がおり、集落の人達が私達の家を建ててくれていた。そこから戦後の新しい生活を始めたのだつた。



◆ 兄のお陰で ◆

私の戦争体験の中で最も大きい存在が私の兄（勝久）である。

私と兄は腹違いで二十七、八歳ほど離れていた。兄は与那原で初めて早稲田大学を卒業し、那覇の会社で働いていた。

兄は、当時としては珍しく髪はオールバックで、平服を着用していた。配給制度が布かれている中でも、油の一斗缶を持ち帰ってきたりするなど、何か特別な待遇を受けている様子が度々あった。

そんな中、あの十・十空襲が始まる直前に私達家族は兄から、北部に逃げるよう強く薦められた。兄は英語が達者で暗号を解読する仕事をし

ていたらしく、その時すでに何か情報を得ていたのだろう、周りの人々が日本は勝つと信じて疑いを持たない時期に、母に「これは負け戦だから、早く逃げないと」と話していたのを覚えている。

ゆえに、母と私は他の人達よりも一足早く、北部へ疎開することが出来た。（父と姉は空襲後合流した）身の回りの生活用品や食糧を全て用意し、船に乗って、辺土名地区の宇良に避難した。そして十・十空襲を逃れ、戦時中も食糧に困ることはなかった。

国の上層部しか知らないような情報を兄が教えてくれたお陰で私達家族は助かった。

◆ 避難民、北と南へ ◆

私達家族は最も被害の少ない地域へ逃げる事が出来たが、日本軍が守ってくれるだろうと期待した人々は南に進路を取ることを選んだ。それが、あの悲惨な南部戦線へとつながることになったのであるが、北へ向かった人々も銃弾の恐怖こそ少な

かったものの、疎開先は土地の人の食糧をまかなうのがやっとなのであった。避難民は餓死やマラリアなどで命を落とす者が殆どで、特に那覇方面から十・十空襲を逃れてきた人々は着のみ着のまま、体力のない子どもやお年寄りからマラリアに罹り命を落としていった。

今でも忘れられないのは、読谷出身の家族連れである。避難しようとする道すがら、老いて動けなくなった父親に息子が一週間ほどの食糧（それでも精一杯だったと思われる）を渡して置き去りにしていった。その後父親は餓死したという。



北中城村熱田の国道329号線沿いにある岩北へ避難する人々はここで休憩をとった。



早稲田大学時代の新垣勝久氏
大正14年頃

◆ 戦争は一度と起こしてはならない ◆

兄は私達を疎開させたあと音信不通になったが、戦後になって兄の戦友が遺骨を持ってきてくれた。話によると兄は昭和二十年の三、四月頃、北部の楚洲で米軍に狙撃され亡くなったとのことであった。

私の父も戦禍を逃れ、なんとか生き残ることができたものの、与那原へ帰村する間にマラリアに罹り他界した。

戦争というのは本当にむごいものである。どのようにしても地獄となり、いいことは一つもない。このような悲劇を生まないよう、戦争は二度と起こしてはならないと強く思っている。

聞き取り調査
人々の証言③

戦時体制下の 学徒らは

与那嶺 盛 昭
昭和3年生
【森下区】

◆ 十・十空襲 ◆

私が県立一中に入学したのは昭和十六年で、その年の十二月には日米が開戦した。当初は日本軍が優勢であったが、昭和十八年頃からは戦況が変わり、硫黄島やフィリピンなどが占領した米軍は、沖縄方面への侵攻を重点目標としてきた。

沖縄戦は昭和十九年の十・十空襲で始まった。その日の朝七時半頃、私は登校中であった。急に高射砲の発射音が聞こえてきて、まもなく敵機による空襲であることがわかった。校舎の二階から那覇市街を見下ろすと港をはじめ街全体が煙火に覆われているのが見えた。

◆ 鉄血勤皇隊 ◆

昭和二十年の三月、米軍は慶良間島に上陸した。私達の卒業式は二十七日の夕方、養秀寮の庭でローソクを灯して質素に行なわれた。我々一中生も鉄血勤皇隊を組織することになった。私は球砲兵隊への入隊を命じられたが、入隊する日の朝から発熱したため、寮で休んでいた。その時、巡回中の篠原教官から「家で静養して来い」と指示されて帰宅することになった。十日位で風邪も治ったので、部隊に復帰することを父に申し出たが、強く反対されたので、やむを得ず断念した。

◆ 南部への避難行 ◆

米軍は四月一日に北谷村の海岸一帯から無血上陸した。部隊へ帰れなくなった私は、父や親戚の人達を合わせた八人で南部へ避難することになった。まず大里村（現南城市）の真境名に避難して古墓に隠れた。そこが危険になったので、玉城村（現南城市）の富里へ移動した。そこで

出会った防兵隊の人から、私と従弟の二人に弾薬を運搬するようにとの指示が出た。昼間の行動は危険なので夜間に新里（現南城市）まで弾を運んだ。

富里から次の避難場所へ移ることになったが、どこへ行けばいいのか迷った。意見は知念方面へ行こうとする組と具志頭方面が安全だと主張する組の二つに分かれたが、結局具志頭方向へ移動することになった。降り続く雨の中を移動したが、その途中負傷した日本兵が木の枝を杖にしてとぼとぼと歩いて行く姿を見た。

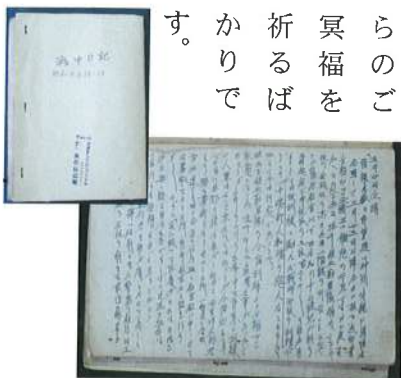
◆ 投降 ◆

六月の十五日頃、摩文仁（現糸満市）の後方の松林に到着した。そこにも敵弾が飛んできたので、私達はギーザバンタの海岸へ移り、岩石壕に身を隠した。目の前の海には掃海艇が浮かび、艦上のスピーカーからは流暢な日本語で盛んに投降を呼びかけてきた。私達はなんとかして郷里の大里方面へ逃れようと崖をよじ登

り、原野を歩き出した。その途中、米兵が難民を監視している場所に遭遇してしまったので、私達もやむなく投降した。

捕虜になった民間人は具志頭部落に連行され、私と従弟は仮設診療所の手伝いを言いつけられた。そこでは負傷者の運搬だけでなく、遺体を仮埋葬することもあった。その後私は百名（現南城市）へ移送されたが、間もなくして開放され、心身ともに自由な生活を取り戻すことができた。

私はなんとか戦渦をくぐり抜けることができた。しかし、元勤皇隊だった私は同年輩だった彼らの最期が脳裏に焼きつき、今でも一抹の深い悲しみと寂しさを感じる。ただただ彼らのご冥福を祈るばかりです。



与那嶺盛昭さんの戦中日記
当時の様子がありありと記されている。

聞き取り調査
人々の証言④

あの与那原の
浜が

大 城 初 枝

大正13年生

【新島区】

◆ 日本軍の配置の中で ◆

当時、私は平安座（うるま市）の青年学校で教員をしていた。青年学校では、男女別の授業で、男子生徒は、鉄砲の持ち方や匍匐前進など戦争に備えての訓練がほとんどであった。私は女子生徒を受け持っていて、主に裁縫や料理についての授業をしていた。食品のカロリー計算では、とにかく食べ物が無かったので、生徒たちと山へ野菜を探しに出していた。そうしたある日、生徒の足元で見つけた野良生えシブイ（冬瓜）の大きさに驚いたことを覚えている。

戦時下の中、やがて学校でも生徒が軍作業に出るようになっていった。その頃、私は名嘉飛行場に生徒



山原船が停泊する兵で海水浴をする女学生

たちを連れて行き、一カ月の半分はその建設作業の土石運びだった。それから何カ月が経った頃、私たちは嘉手納飛行場での建設作業に従事していた。そんなとき、慶良間の方から艦砲射撃が始まった。一日中艦砲射撃が続いた日、嘉手納のサトウキビ畑で生徒たちとじつと隠れて、サトウキビをかじりながら攻撃が静まるのを待った。夜が明け、そ

の場所を離れた。生徒たちをみんな家族の所へ連れて行き、私が家族の疎開先の山原へ行ったのは、その年の四月だった。

◆ 結婚を機に与那原へ ◆

昭和二十年の終戦後、私はその年の十月に開校したコザ高等学校の教壇に立っていた。それから二年後、同僚だった与那原出身の大城實と結婚し、与那原へ住居を移した。

れ出る水が流れガーラになっていて、そこで野菜を洗う姿や農家の人が作業で汚れた足を洗う人の姿を見たことがあった。しかし、戦後に訪れたときには見渡す限り町が平地になっていて、愕然とした。

そんな変わり果てた町の中、主人の実家は戦争の被害を受けず残った二軒の家の中の一軒であった。家に覆いかぶった砂や石を全部払い落とし、主人の家族と共に生活を始めた。



↑ 戦災で免れた家
大城さん宅

敷き均された土地に砲弾で空いた大きな穴がいくつも見られる

昭和20年撮影 資料：沖縄県公文書館

聞き取り調査
人々の証言⑤

父のお骨を
抱いて帰村

津嘉山 キヨ
大正4年生
【浜田区】

◆ 与那原から北部へ ◆

当時身重だった私は、臨月に入ってから今まで住んでいた大阪から与那原の実家に帰って来た。

一九四四年（昭和十九）九月、長女を出産した。その頃の与那原は、北部への疎開が始まり、大勢の人たちが村を出て行っていた。

間もなくして、私たち家族も疎開することになった。皆の着替えを背負い、生まれて間もない娘を抱いて、父と弟の四人で山原へ向かった。

私はお乳がぜんぜん出なくなっていたので、泡瀬で空き家になった親戚の家へ行き、そこで重湯を作って娘になめさせた。それから暗くなつてからその場所を出たが、焼夷弾が

バンバンと激しい爆音を響かせ、夜道を照らしていた。私たちは山沿いに隠れながら歩き、やつとの思いで金武へたどり着いた。

◆ 壕へ入れてもらえず ◆

金武の壕を出て、しばらく歩いていると頭上からガラガラガラと葉きょうが落ちてきた。私たちは急いで避難場所を探し、集落で見つけた壕へ飛び込んだ。しかし、私が子供を抱いているのを見て、「子供は泣くから出て行け！」と追い出された。それからは、安全な場所を探しながら父一人で壕を掘り移動をしていった。壕の中では、家族寄り添って座り、休むことができた。

◆ 漢那集落での生活 ◆

漢那で私たちは終戦を知った。漢那集落には、大勢の難民が空民家に入つて過ごしていて、私たち家族もそこに入った。そこでは、那覇出身のリナさんという方が班長で、皆に配給品を分けていた。

私は集落の中で小学校の代用教員

をすることになった。仕事があるときには、家の近くに住んでいた読谷出身の伊波さんという方に娘の守りをしてもらっていた。

その頃の父は、栄養失調と避難中に私たちを守るために何度も壕を掘り続けた疲労で体調を悪くしていた。

ある日、父は私に「暑いから木の下に連れて行ってくれ」と言った。木陰へ連れて行き、そつと父を地面に座らせた。そして目の前にあつたカボチャを見て、「チンクワー（カボチャ）が食べたいから炊いてくれ」と言った。その後、カボチャを食べながら静かに父は亡くなった。

お世話になっていた伊波さんに手伝っていただき、父の遺体は砂地に埋葬した。



与那原のテント小屋前でキヨさんの娘・幸子さんが6歳頃の写真

撮影：1950年頃

◆ 父のお骨を抱いて帰村 ◆

帰村となった。砂地から父のお骨を取り出し、拾ってきた一斗缶へ入れて落下傘で口を縛った。私は娘を背負い、父のお骨を抱いて、車を拾いながら与那原へ向かった。

屋嘉村で、收容所の前を通った。そこには大勢の兵隊がいて、空き缶で作った三線の音が聞こえていたのを覚えている。



◆ 憧れの少年航空兵を断念 ◆

私は第一大里尋常高等小学校を一年半ばで中退した。幼い頃から憧れていた少年航空兵の試験に合格したが、両親の承諾が得られず、入隊の手続きができず断念せざるを得なかった。

それから間もなくして、私は沖繩県営軽便鉄道で機関助手として働くことになった。那覇と糸満の間をつなぐ列車に乗務し、石炭や水を補給するのが私の仕事であった。

一九四四年（昭和十九）の十・十空襲から二ヵ月後の十二月に起きた列車の大爆発事故のことは今でも忘れない。那覇から弾薬や食糧を積ん

で糸満方向へ走っていた列車が、稲嶺（南城市）の辺りを通過中に爆発したのだ。多くの人が犠牲になったが、私はすぐに飛び降りて助かった。その事故の後、私は国場組の社員として読谷飛行場の球部隊で仕事をするようになった。読谷村の喜名集落には土木課、伊良皆集落には建築課が置かれていた。私は建築課の一員として宿舎から伊良皆へ通い、宮平鉄鋼の人たちと一緒に、主にボルトなどの铸件作りを担当し、毎日のように体がフラフラになるまで働かされた。

◆ 担架ごと置き去り ◆

一九四五年（昭和二十）になると米軍の本格的な空襲が始まった。四月一日、米軍は沖繩本島に上陸した。上陸地点に近い読谷一帯は敵軍の激しい攻撃に晒された。危険を感じた私たちは球部隊の兵士らと一緒に近くの山の中に隠れたが、ほとんどの人が死んでいった。

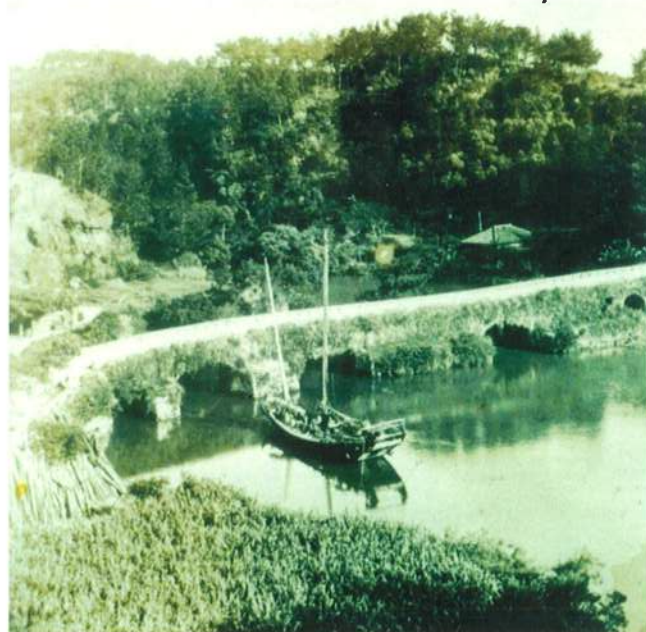
私も片方の足に弾が当たり、肉が抉れるほどの重傷を負って歩けなく

なった。衛生兵の担架に乗せられて機銃掃射の中を安全な場所へ向かった。一つの防空壕を見つけると、兵士らは私を担架ごとその場に下ろし、そのまま去ってしまった。私はこのままでは死んでしまうという危機感から、森の中を無我夢中で這うように進んで行った。

途中、幸いにももう一つの壕を見つけたが、その中には避難民の女性や子供が大勢入っていた。しかし、そこは航空隊の壕だったようで、兵隊らに日本刀を振り回され、強制的に追い出された。

◆ 父に迎えられ ◆

私は負傷した足を引きずるように、グーサン（杖）を突きながら山中をさま迷った。ようやくの思いで比謝川（読谷村）の大橋の辺りまでた



比謝川 橋まで与那原船が上っている（年代不明）

どり着き、空き家に避難している時に保護され、捕虜となった。

私が大怪我をしていることを人づてに聞いた父は、荷馬車を借りて読谷まで迎えに来た。すぐに兼久（西原町）に連れていかれ、獣医の診察を受け、「足を切断するしかない」と言われたが私は断った。傷口はひどい匂いがするほど化膿していたが、妹の美津が辛抱強く手当てをしてくれたお陰で歩けるようになり、戦後生活への第一歩を踏み出すことが出来た。

聞き取り調査
人々の証言⑦

3カ月の疎開
生活のはずが

新垣 菊

大正15年生
【上与那原区】

◆ 兄二人が兵隊へ ◆

私は十六歳のとき
に紡績の仕事で
県外へ出ていた
が、翌年、兄二人
が徴兵検査を受け
て、合格したこと
を家族から知らさ
れ帰郷した。

私の家は父が瓦
作りをやってい
て、県外から戻っ
てきてからは、そ
れまで兄たちが
作っていた瓦の仕
事を私は手伝うこ
とになった。

◆ 宮崎へ疎開 ◆

一九四四年（昭和十九）には、沖
縄も戦時下となっていた。その年の
夏、父から家族に「日本は負けない
けど、食糧が無くなって来ているか
ら宮崎に疎開しなさい」と告げられ、
急なことで私は戸惑ったが、沖縄に
残ることを決めた。しかし、母から
弟や妹が寂しがるからとの事で私も



菊さんが瓦作りを手伝っていた頃の写真

（左側2人は日本兵 撮影：昭和17年頃）

一緒に行くことになった。父も一緒
にと話したが、「ヤッチー（兄）た
ちから手紙がきたら誰が受け取る
か」と、一人与那原に残った。

着替えを風呂敷に包み、それを頭
の上に載せて与那原を出発し、那覇
駅で降りた。那覇の宿泊所で二、三
泊してから那覇港に向かった。父と
の別れで、私たちがきょうだい泣い
ていると、「三カ月の別れなのに涙
が出るか！」と父に叱られた事を覚
えている。

私たちは鹿児島で数泊かしてから
汽車に乗り、宮崎に着いたときには
夜になっていたが、地元の人たちは
私たちのためにおにぎりを用意して
くれていた。その日私たちは公民館
に泊まり、翌日には指定された集落
に行き、各自割り当てられた民家や
公民館に入った。私たち家族はモト
ブさんという方の家で、親戚と二家
族で隠居部屋のようなとてもきれいな
家へ案内され、少し落ち着いてか
ら、弟と妹は地元の小学校に通い始
め、私は後藤製材所へ勤めることにな
った。

宮崎へ来て三カ月が過ぎた。短い
期間の疎開生活と思っていたので、
冬着を持ってきておらず、藁草履に
半袖の服だけだった。収入があるの
は私一人だけで、母が近所の畑仕事
を手伝った対価で貰った芋などを売
りに行くこともあったが、生活は苦
しかった。

一九四五年（昭和二十）八月、製
材所で皆と昼食を食べていた時、壕
建設に使用する木材を切るために、
毎日のように出入りしていた兵隊が
私たちに「負けたよ」と、敗戦を知
らせた。その一言で女子工員と私は
泣き崩れてしまった。

◆ 帰村 ◆

久場崎に上陸し、インヌミ屋取か
ら米軍トラックに乗せられて、上与
那原で降ろされた。変わり果てた風
景の中で、馴染みの友たちに出会い、
お互いの家族の無事を確認し喜ん
だ。